史料紹介と研究

野口遵氏寄贈原本類についての覚書

藤原　重雄

はじめに

本年は、戦前に一代にして日窒コンツェルンを築き上げた実業家として著名な野口遵（したがう）（一八七三年七月二十六日～一九四四年一月十五日）の生誕百五十年となる。野口は旭化成株式会社の実質的な創業者でもあって、同社前身の中核となる工場が設けられた延岡市では、創業百年を期して昨年十二月に音楽ホールを中心とする野口遵記念館がオープンしている。

史料編纂所では国宝一件・重要文化財二十件（前号にて『言継卿記』指定を速報）を所蔵するが、そのうち『南無阿弥陀仏作善集』と『和歌真字序集』は野口からの寄贈である（以下、寄贈者への敬意を欠くが近代史上の重要人物として敬称は割愛する）。とりわけ『南無阿弥陀仏作善集』は、東大寺復興に力のあった勧進聖の重源（一一二一～一二〇六）が、晩年に自らの事績を書き上げた根本的な伝記史料で、『島津家文書』『実隆公記』と並ぶ本所所蔵貴重書の代表格である。以下、一次史料の調査には及ばないが、野口遵による寄贈史料について基本的な情報の整理を行う。昨年十二月の国立国会図書館デジタルコレクションのリニューアルによって、篩にかけるには億劫な資料類を一挙に確認できるようになり、予備的考察をまとめておきたい。

一、「徳川家康年貢皆済状」の寄贈

野口遵から本所への寄贈史料は、少なくとも下表の八点が確認される。

①「徳川家康年貢皆済状」が他に先行して明治三十八年（一九〇五）に、残り七点が明治四十二年に一括して寄贈されている。①にはa野口遵寄贈証（明治三十八年十一月十六日）、b平子尚書簡、c平子尚葉書が附属する。

史料編纂所所蔵の野口遵氏寄贈史料（架番号順）

	架番号	史料名	員数	登記番号	備考
①	S貴02-1	徳川家康年貢皆済状	1幅	——	家康自筆、慶長十六年（1611）二月廿八日、猪太郎左衛門尉（猪狩光治）宛。酒井作右衛門尉重勝副状（同年卯月三日）とともに表装。『古文書時代鑑』下-152。野口遵寄贈証・平子尚書簡・同葉書の3点附属。
②	S貴03-13	十一面法肝要抄	1巻	151347	奥書「建久八年（1197）正月二日、於（神護寺）西房以理明房（興然）阿闍梨御房御本書了」（七を八に訂す）。本紙端裏「十一面法　慈尊院本」、裏打紙外題「十一面法〈肝要抄〉建久ー奥書　高弁上人書『宙四十一』」。勧修寺慈尊院興然『五十巻鈔』とは別内容、『伝受類集鈔』巻八に同内容あり。朱点あり。奥書内容は方便智院の定真に適合するが本文筆蹟は別。要修補。
③	S貴03-15	大将歴名	1帖	151347	鎌倉時代後期（弘安年間）写。「左右近衛大将人名録」。『影印叢書』2。識語「行能筆」あるも年代合わず。相剥ぎして巻子装とされていたものを、原装の粘葉装に近づけて修補済。
④	貴14-5	sarvakarmaki 第八略抄	1巻	151347	鎌倉時代前期写。『一切業集』、「成賢筆第八略抄」。能満院（『所報』37）・湖北省博物館に僚巻あり。紙背に『本朝文粋』断簡を含み、『日本歴史』627（2000年）口絵、中尾真樹「大河内本『本朝文粋』巻第十三・十四の構成について」（『国語と国文学』94-4）参照。要修補。
⑤	貴15-2	瑜伽師地論巻第八十五	1巻	151350	平安時代写。法隆寺一切経（巻首巻末・紙継目裏に墨方印）。箱蓋ウハ書「瑜伽師地論巻第八十五〈称天平経者／法隆寺一切経蔵印〉」、同裏「明治卅三年一月、於虚白庵中万里居士題函」。裏打ちされているが修補も要検討。
⑥	S貴17-1	◎和歌真字序集（1963年重文指定）	1巻	151349	本奥書「応保二年（1162）三月三日書写了」、鎌倉時代前期写。「扶桑古文集」。紙背文書あり（大江広元宛の藤原範綱書状が大半）。『影印叢書』2。本文は『所報』2・4、紙背文書は『紀要』17に翻刻。修補済。
⑦	S貴17-6	雑例	1巻	151346	鎌倉時代前期写。守覚法親王『修法要抄』巻六。脱落・錯簡あり。箱蓋ウハ書「雑例〈守覚法親王筆〉」。要修補。
⑧	S貴17-8	◎南無阿弥陀仏作善集（1966年重文指定）	1巻	151348	鎌倉時代前期写、重源自筆か。紙背に建仁三年（1203）「備前国麦進未并納所所下惣散用帳」。『影印叢書』2。修補済。修補前コロタイプ複製［6615-1］あり。

【①a】野口遵「徳川家康年貢皆済状」寄贈証

寄贈証

一、徳川家康年貢皆済状壱幅、

右、御掛用史料として寄贈仕候也、

東京本郷区五丁目廿番地

明治三十八年拾一月拾六日　野口遵（朱丸印「野口」）

東京帝国大学文科大学／史料編纂掛御中

【①b】平子尚書簡

拝上、先般御目にかゝり申候砌、愚生申上候野口氏珍蔵家康年貢状の義、於掛御用とあらは寄贈仕度ものとの御事に御座候間、別紙寄贈証手続乍不明に愚生代筆仕、御手許までにさし上候、もしこれにて不都合に候はゝ、文案お示し被遊度、早速改め可申候、乍去同家主人氏は不在勝のことに御座候間、可成右別紙のまゝにて相通し候はむこと幸甚に存候、何れ拝趨の節、輩縷申陳候、　不宣

拾壱月十五日　平子尚／敬具

田中先生尊下／謹空

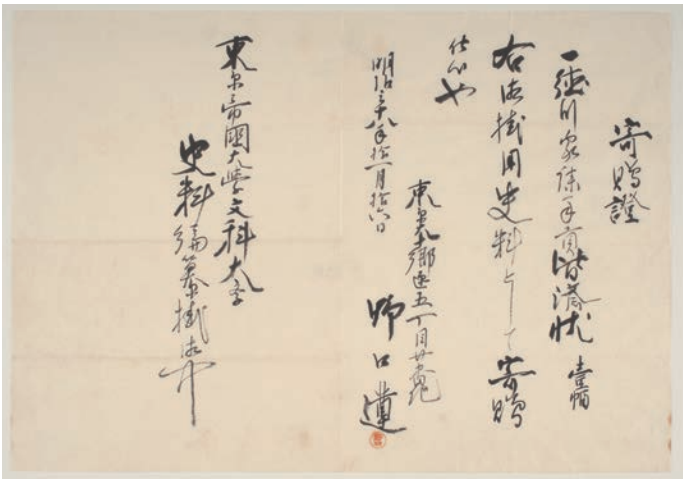
【①c】平子尚葉書

拝復、野口氏の儀、総長よりの御状にても有之は充分とのよしに御座候、右本日電話×（相カ）談にて意と（を）得不申、乍略儀葉書令申入候、　早々

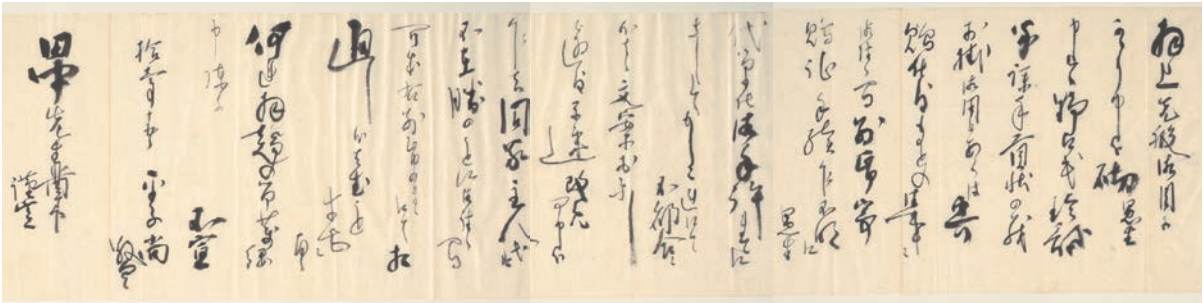
※差出「博物館／平子尚拝」で十八日付、十一月二十日消印。

田中義成宛の封筒があり、裏面では十一月十五日付けで野口が差出となっている。切手の押印は年が読みにくいが、【①a】寄贈証を郵送した際のものであろう。田中義成[1]（一八六〇～一九一九）は、同年四月に史料編纂官兼文科大学教授に任じ、この時から設けられた史料編纂主任（事務主任と史料編纂主任との二頭体制）の要職に就いている。

①c　平子尚葉書（表面）



①a　野口遵寄贈証



①b　平子尚書簡（端奥余白割愛）

寄贈にあたっては帝室博物館の平子尚が仲介となっており、同じく田中義成宛の書簡【①b】と葉書【①c】はこれに関わるものである。【①b】は寄贈証に添えた書簡で、平子が代筆した書類を送付すること、野口は不在がちなので特に問題なければこれで処理して欲しい旨を伝えている。野口の住所は、現在の「金魚坂」（金魚屋・喫茶）のおおよそ向いになる。[2] 史料編纂掛は山上御殿から法文科大学内へ移った時期で、いずれにしても上野の帝室博物館よりは近いが、野口が不在がちという事情とも対応するのだろう。野口本人の筆蹟とは比較していないが、寄贈証は【①b・c】と書体は異なるも同筆で、平子が書いたものに印を貰っている。

史料編纂掛では史学会大会にあわせて史料展覧会[3]を開催していたが、その第四回が明治三十八年十月二十七～九日に開催され、第一室（山の上の会議所）第四区に①が展示されている。明治四十年四月五～七日開催の第五回では、第一室第三区に「東京野口遵氏寄贈／東京文科大学所蔵」として陳列された。寄贈証の日付は、陳列のために史料を借用していた時期の一カ月後で、おそらく返却にあたって所蔵者とのやり取りがあり、そのまま寄贈されるに至ったと思われる。野口と田中は直接に会っていない可能性があり、寄贈後の【①c】では、総長名義の受贈証を依頼している。

【①b・c】の平子尚[4]（一八七七～一九一一）は、鐸嶺の号の方がよく知られている美術史研究者で、三十五歳の若さで亡くなったが、法隆寺再建・非再建論争での国史の史料批判で名を残した。この時には帝室博物館嘱託兼内務省嘱託で、仲介した経緯にはいくつかの可能性があり、詳らかでない。

影写本『野口文書』［3071.76-28］には、この①一点のみを収めている。奥に「明治三十二年五月、野口之布（ゆきのぶ）嗣子野口遵蔵本ヲ影写ス」とあり、展示・寄贈までの間には数年ある。広島藩家老・浅野家の『浅野文書』等に合綴されて広島県に排架されているのは適切でないようにも見えるが、[5] 遵は大正八年（一九一九）末に広島へ移住し、大正十年に渡欧して、そののち東京に戻っており、広島に居住していた時期がある。[6] 昭和初年の興信録の類にも「廣島縣士族野口之布の長男」とするものがある（例えば人事興信所編『人事興信録』第八版、昭和三年）。他の合綴された影写は大正六～十年で、広島在住の期間とも重なる。この影写本の奥に「野口之布嗣子」とあるのは大きな手がかりで、本所に寄贈された原本類は、遵の父之布の蔵書と目される。

二、父の旧蔵書

野口之布[7]（一八三一～九八）は、加賀金沢藩家老横山氏の儒臣で、江戸の昌平黌に学び、金沢で藩士の教育にあたるが、文久三年（一八六三）の禁門の変後に勤王派として終身禁固となり、明治維新によってそれが解かれた後は新政府に出仕した。明治十三年に官を辞し、前田家編輯方に加わって加賀藩史の編纂に携わった。遵は明治三十四年に亡父の文集『犀陽遺文』を刊行し、昭和十年（一九三五）に八田健一『野口之布先生勤王事蹟』もまとめられているが、その蔵書については具体的に現れていない。

江戸後期から近代にかけて、同好の士が古物・珍品等の所蔵品を持ち寄って鑑賞・談話する会合がもたれ、明治期の東京でも好古社や集古会といった好古趣味の結社が、メンバーも重なり合いながら活動していた。之布は好古社に入って会誌に寄稿し、また所蔵品を会合に出品している。好古社は、明治十四年に福羽美静（一八三一～一九〇七）が始めたもので、毎年二回、古書・古器を集めて観覧するとともに、会誌『好古雑誌』の毎月刊行を目指したが、三年目の九号で中絶したようである。会合そのものは継続し、明治二十四年十月の時点で社員三百名を擁し、井上頼圀を中心とする体制で翌二十五年から『好古叢誌』の毎月刊行を再開した。四年目の同二十八年からは年二回刊となり、七年目の同三十一年まで発行されている。『好古雑誌』の段階では之布の名前は確認されず、『好古叢誌』初編巻十二（明治二十五年十二月）の社員表になって、社員番号五百四十五号「東京市本郷区元富士町二番地[8]　野口之布石川県士族」として小杉椙邨（すぎむら）の紹介による入社が確認される。『同』二編巻五（明治二十六年五月）には「楠公訣子図賛考」を寄稿して、前田家蔵品の紹介を行うとともに、第二十二回春季の会合（同二十六年四月）への参加が確認される。そして第二十五回・第二十七回の好古会には

所蔵品を出品している。

『好古叢誌』四編下（明治二十八年十一月発行）によると、同年四月二十八日の第二十五回春季好古会に、所蔵する「鎌倉時代墨蹟　五点」の

大将補任（自藤原内麿 至藤原兼忠）　一巻
南無阿弥陀仏作善集　一巻
賀茂祭御幸部類（自建長二年 至正安三年）　一巻
後嵯峨上皇御出家記（自文永五年十月五日 至同二十五日）　一巻
古油絵　一葉

を出品している。本所現蔵の③『大将歴名』・⑧『南無阿弥陀仏作善集』のほか、徳富蘇峰（一八六三～一九五七）の成簀堂文庫を継承する石川武美記念図書館（旧・お茶の水図書館）に『賀茂祭御幸例記』・『後嵯峨上皇御落飾記』として現在は所蔵されている。[9]

次いで翌年の『同』五編下（明治二十九年十一月発行）によると、同年五月三日の第二十七回春季好古会には、

灌頂香具出所（永仁五年鈔本）　二巻
勝宝院等諸末派寺領公文　一巻
古経遺文（狩谷棭斎草稿本）　一冊

の三点を出品している。『灌頂香具出所』は前田育徳会尊経閣文庫に現存するようで、「勝宝院等諸末派寺領公文」については調べておらず、『古京遺文』は『国書総目録』では東京国立博物館・穂久邇文庫に自筆本を載せるが、これに該当するのか未確認である。[11]

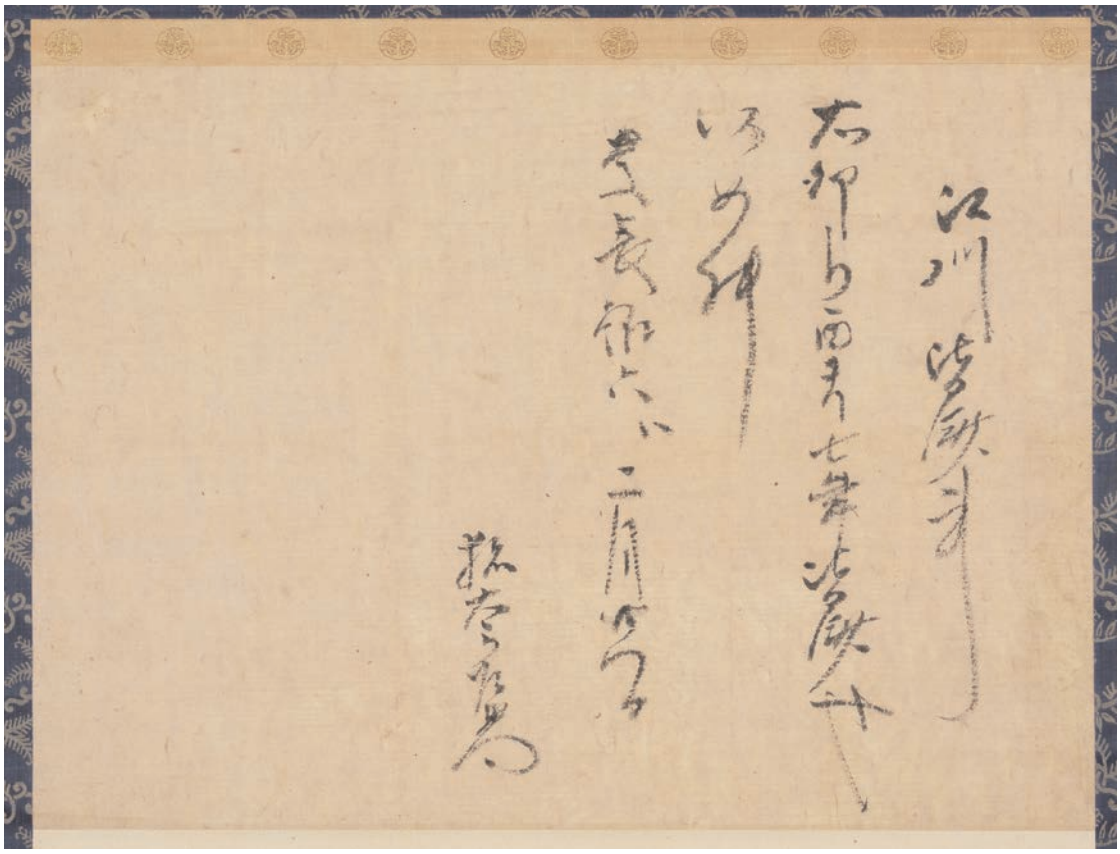
本所以外の所蔵となった古写本の原本は未見で、個別の報告は機会を改める。その他には、『石川県立図書館要覧　昭和五年度末現在』（一九三一年）、およびそれにもとづく『図書館雑誌』二五八（一九四一年）に載せる石川県立図書館の年譜に、昭和三年度のこととして「勤皇家野口之布氏ノ秘蔵書類二十数点ヲ遺子遵氏カラ寄贈サレル（四月）」とあり、『石川県立図書館月報』五〇（一九二八年五月）に二十件の資料名を掲載する。[12] 先に同年三月には野口駿尾（遵の弟で画家）から『犀陽遺文』の版木が寄贈され、六月には『犀陽遺文』と『加賀藩勤王始末』を図書館から再刊している。石川県立図書館へ寄贈された分は、書名からは之布の自筆稿本や同時代的なものとみられる。また本所には、之布蔵書を明治十二年に修史局にて謄写した『加賀藩某聞書』[4140.5-64]・『加賀藩某天延雑記』[4140.5-65]（元文～文政）がある。金沢市立図書館『加越能文庫解説目録』上・下（一九七五・八一年）に収めるのは、尊経閣文庫から寄贈された加賀藩行政資料で、之布旧蔵として『聞書』[2579]・『水藩士黒沢忠三郎口語』[9315]が見え、[13] 前者は謄写本の原本のようである。さらに之布の叔父で日蓮宗の学僧である日輝（一八〇〇～五九）の著作『学仏具眼抄』も遵に継承されていたらしい。[14]

遵寄贈の原本類のうち、確実に之布旧蔵は③⑧のみで、⑤の箱書は之布没後の明治三十三年なので、遵の関与もありうるが、蓋然性として、之布が所蔵していた古典籍の重要な部分を本所では受贈したと言えそうである。[15] 江戸・東京の市中や交際のなかで入手したか、金沢ないし東京で前田家ゆかりの品を入手したか、いずれも可能性は考えうる。また、すでに本来の所蔵者から離れた品のようでもある。

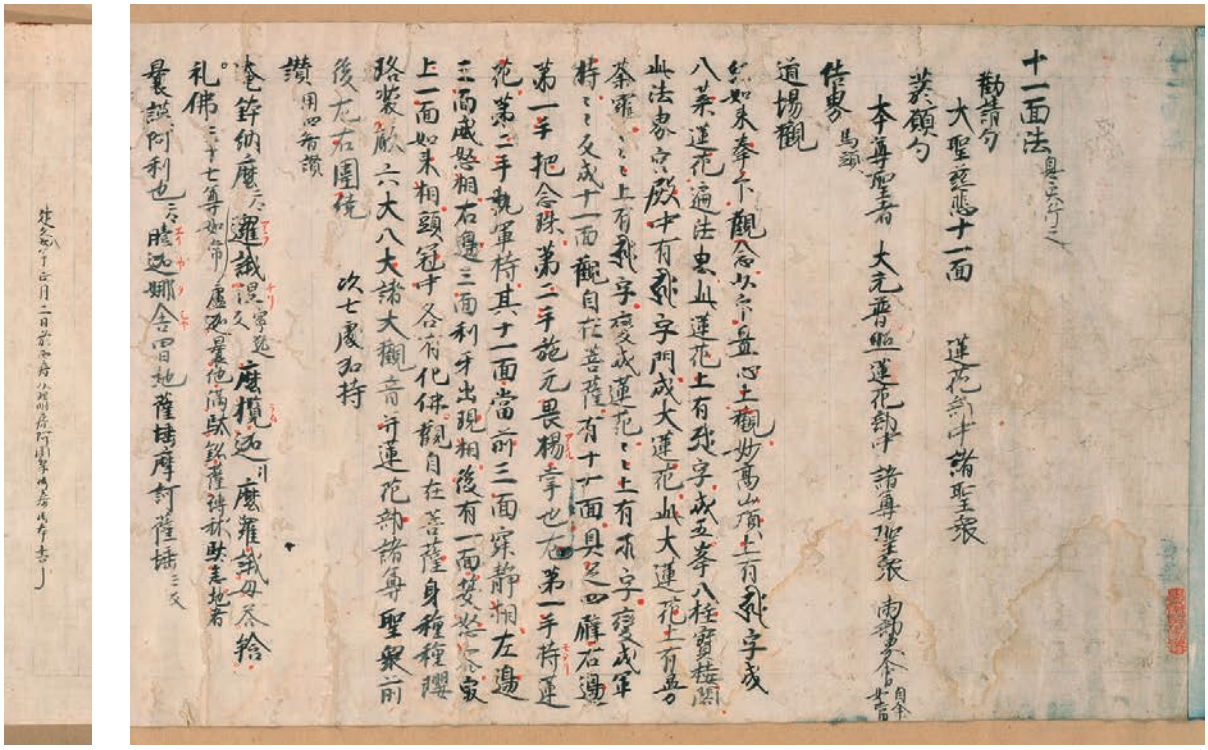
三、遵による寄贈時期

これで野口遵が何故これらの貴重史料を所蔵していたのか、見通しは立った。ただしもう一つ疑問は残る。本稿執筆の背景には、二〇〇一年の史料集発刊百周年記念展の準備過程で野口から複数の寄贈史料があるのに気づき、『東京大学史料編纂所影印叢書』二・平安鎌倉記録典籍集（八木書店、二〇〇七年）で⑥『和歌真字序集』の解題を担当した際に、遵がまだ若いことに不審を覚えたことがある。遵は晩年となる一九四一年に、全財産を投じて化学工業振興のための野口研究所と朝鮮奨学会を設立した。このことには言及が多いものの、本所への寄贈は、事業家として成功する以前の年代、むしろ事業資金を必要としている時期と思しい。今なお明確な理解には至っていないが、前後の時期の状況を確認しておく。[16]

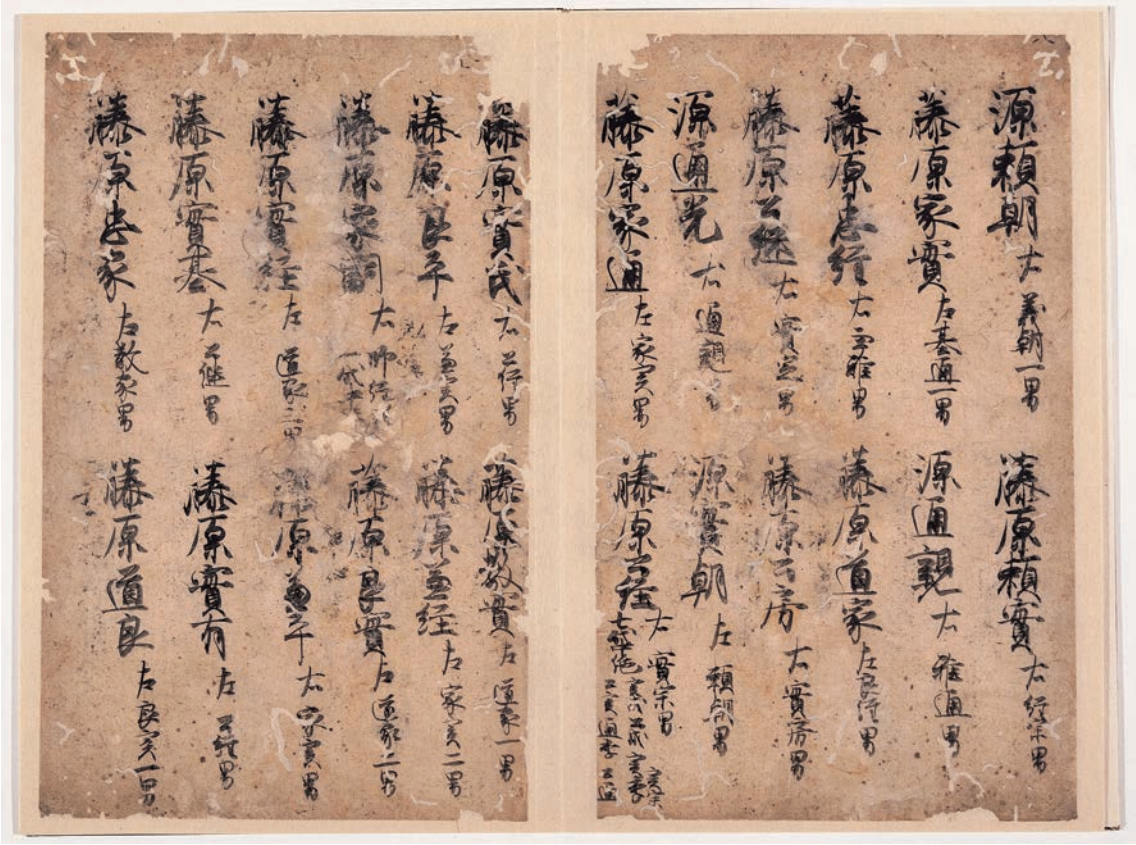
遵は、帝国大学工科大学で電気を学んで明治二十九年に卒業し、東北の電



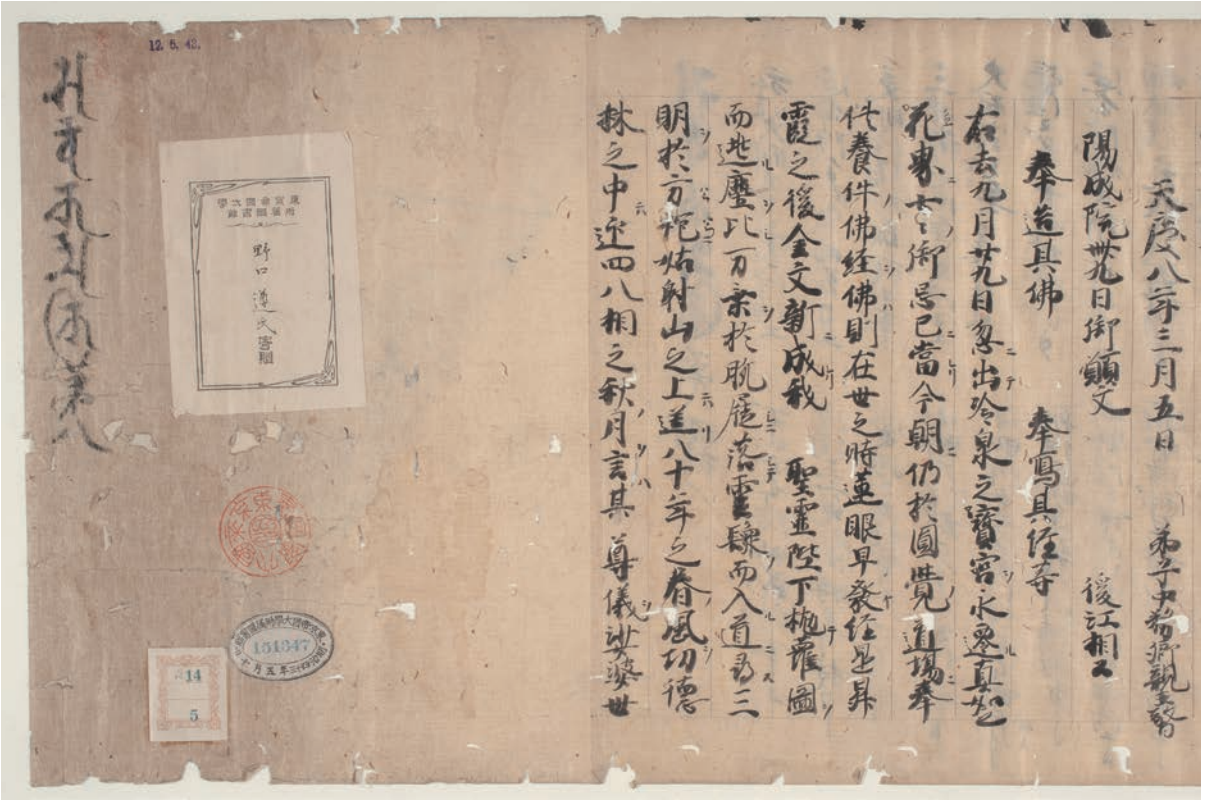
① 徳川家康年貢皆済状



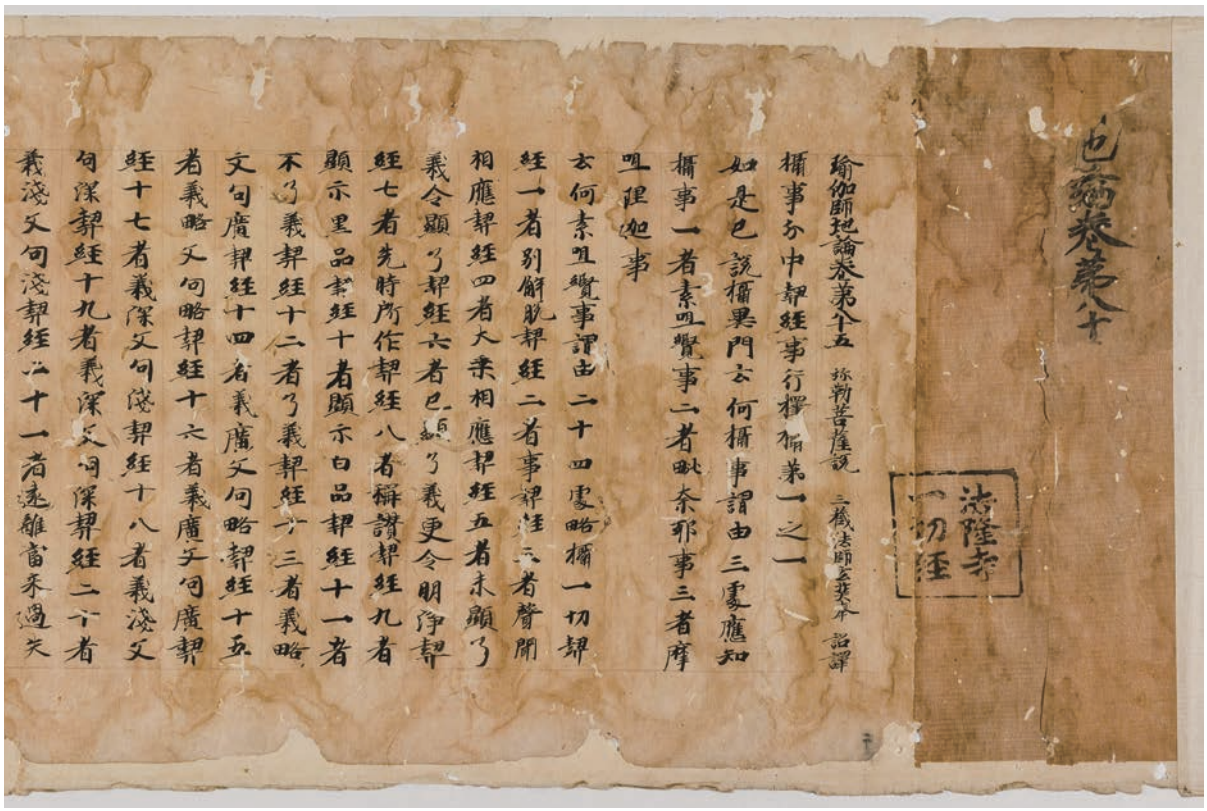
② 十一面法肝要抄（巻首・奥書）



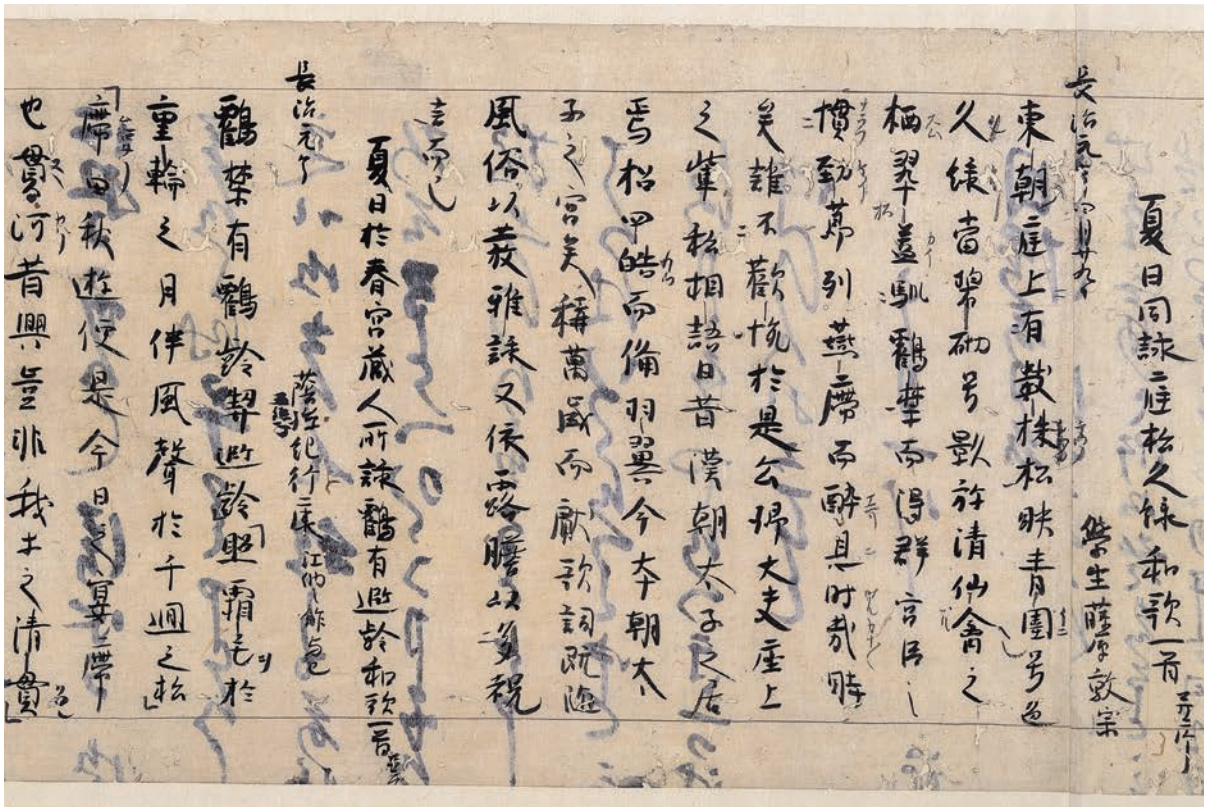
③　**大将歴名**（巻中）



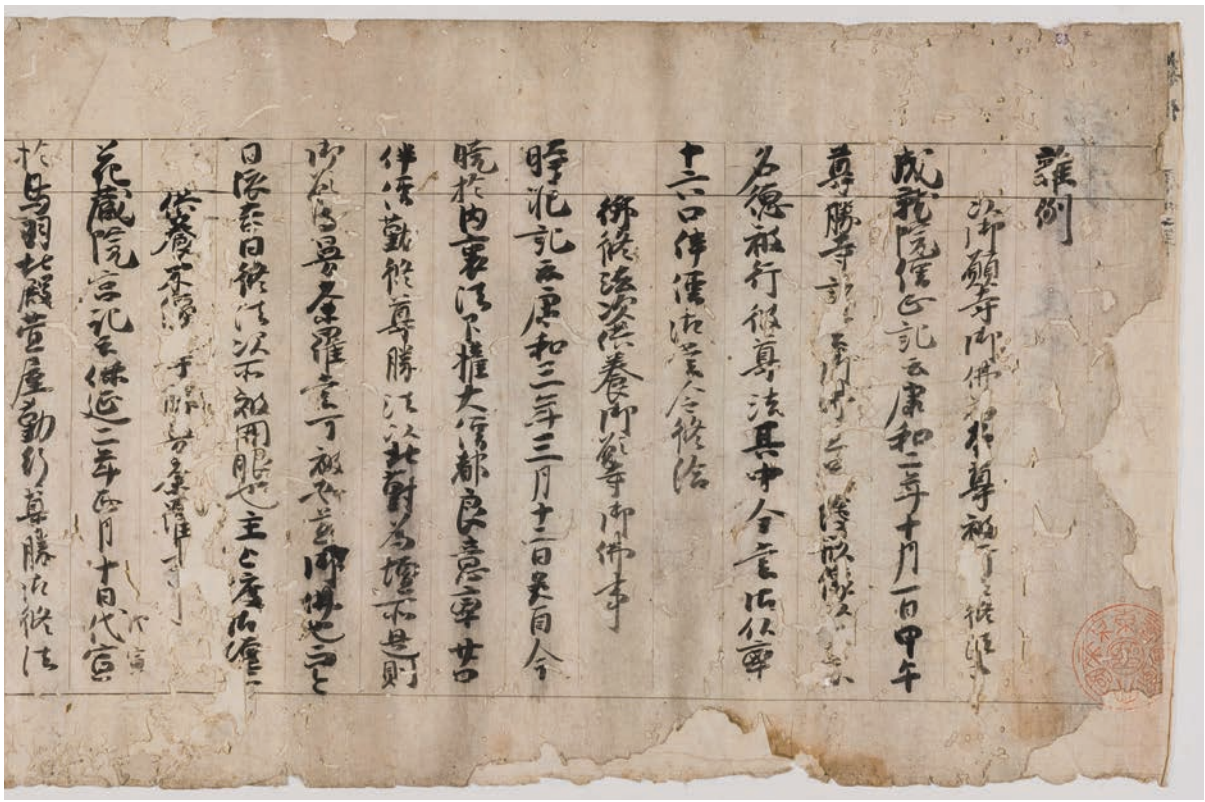
④　**sarvakarmaki 第八略抄**（表紙・紙背『本朝文粋』断簡）



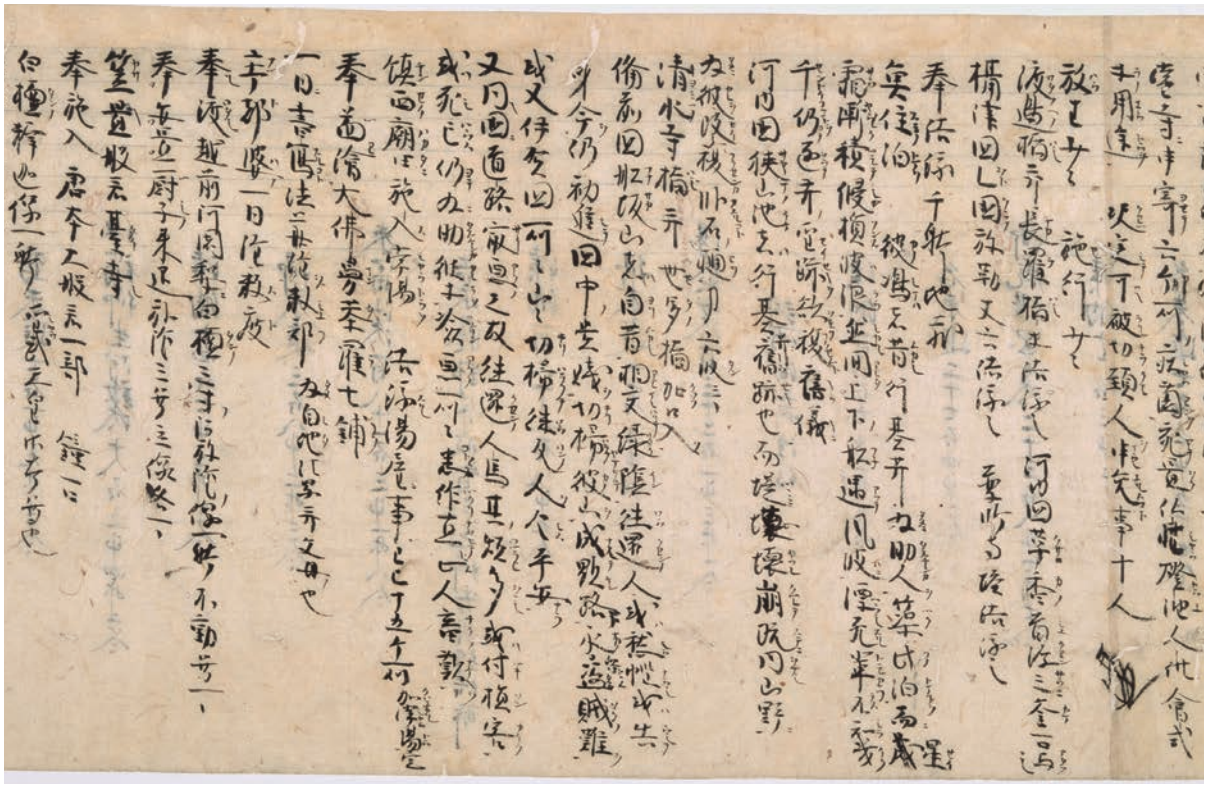
⑤　**瑜伽師地論巻第八十五**（原表紙・巻首）



⑥　**和歌真字序集**（藤原敦宗「夏日同詠庭松久緑和歌一首」）



⑦　**雑例**（巻首）



⑧　**南無阿弥陀仏作善集**（摂津国渡辺橋・長羅橋以下）

力事業に設計者として関与して、カーバイト（ランプの燃料）生産の開発に携わった。明治三十一年三月二十二日に之布が六十九歳で亡くなると、家族のために東京へ戻る必要が生じ、シーメンス事務所に就職する。明治三十八年、日露戦争中に東京電灯株式会社の依頼により、外債を募るため、親友の福島金馬とともに米国・欧州へ渡った。米国での資金集めは難航し、ドイツへ移ってシーメンスの伝手に頼るが、五月に日本海海戦の勝報が伝わると、借款の約束を取り付けることに成功した。しかし帰国すると、もう他に借款ができたので、必要なくなったと言われてしまう。新橋の待合でやけ酒を飲んでいて、鹿児島の代議士と金持ちと顔を合わせるうちに意気投合し（いくらか脚色はあろうか）、明治三十九年一月に曽木電気株式会社を設立して、川内川の曽木滝の水力を利用した発電事業を開始する。その電力を用いたカーバイト工場を水俣に設け、さらにカーバイトを原料とする石灰窒素（肥料）生産の特許を買収すべく、明治四十一年二月に再び渡欧して、四月に契約に成功した。八月には日本カーバイト商社と合併して日本窒素肥料株式会社を設立し、翌年一月に水俣工場が完成した。ただすぐには事業化に成功せず、野口自らが現地で技術改良に乗り出している。

①の影写本作成が明治三十二年五月、寄贈が三十八年十一月、さらに②～⑧の影写本作成が四十一年六月で、翌年五月五日に寄贈を受けている。曽木電気設立頃までの遵の動向は自叙伝が基礎となっており、月日まで把握できていないが、①は一度目の渡航前、②は二度目の渡航帰国後の会社設立期と、慌ただしいなか当人が関与しても矛盾はしないと言えようか。遵に対しては、「書画・骨董は固より茶の湯だとか、能楽と、さう云う寂びたる趣味は無く、最も凝られたのは囲碁で」[17]と回想されているが、「書画の鑑識及び詩文の解説、当を得たる事多かりき」[18]という評もあり、儒者の家で培った素養を備えていたであろうし、父の文集を自家出版するなど、学問への畏敬の念は篤かった。近世史家の幸田成友（一八七三～一九五四）とは幼馴染で、大学卒業後に会う機会はなかったようだが[19]、幸田については自叙伝の中でも語っている。寄贈に幸田が関係しておれば、触れられただろう。

遵の母幸子は八十九歳まで長寿を保ち、昭和十三年に亡くなった。父が亡くなった時に遵は二十六歳で、①寄贈時も三十三歳とまだ若い。寄贈は家族の意向に家長として対応した側面もあろうか。弟駿尾は八歳下、余波（なごり）は十一歳下で、一歳下の妹である操は、三人の子を儲けた夫に明治三十五年に先立たれて寡婦となっている。これら古書を売却すれば相応の金額になったであろうから、寄贈には何かしらの意志があったようにも想像される。

②～⑧寄贈の経緯についてはまだ材料がない。持ち込みの可能性もあるし、採訪を申し出たとも考えられる。⑧については、編纂・刊行中の『大日本史料』第四編と密接な関わりがある[20]。寄贈後、明治四十三年五月十日付の登記印が捺され、『東京帝国大学附属図書館増加図書月報』三五（明治四十四年三月）二～四頁に史料編纂掛の蔵書として著録される。

むすびにかえて

以上、重要文化財二点を含む貴重書群ながら、その伝来に関して本所内部でも詳しく情報が継承されておらず、寄贈者についてもあまり認識されていないため、概要の確認を行った。受贈者側の対応として十全なものになりえなかったが、より正確な諸事情は今後明らかにされることもあろう。文京区の郷土史あるいは大学史としての掘り下げは甘いものの、ある時期に現在の本郷キャンパス内の前田侯爵邸に所在し、その後も本郷五丁目（旧新表示）にあった可能性のある古写本が、本学卒業生から本所へ寄贈されたことになる。複製による蒐集を旨とし、原本史料の収蔵機関としてはコレクションの充実を要する段階で、その基礎となる重要史料が野口遵からの寄贈により所蔵品に加わった。本所に保管されていたことで、結果的に、今年九月で百年を迎える関東大震災による附属図書館の焼失から難を逃れ、本学が擁する文化財としても最重要な一角を成すこととなった。

註

（1）『東京大学史料編纂所史史料集』（二〇〇一年）五〇六～五一三頁に履歴資料・追悼文を収める。

（2）昭和四十年（一九六五）に住居表示が大きく変わり、現在の本郷五丁目二十二番地のうち。文京区立図書館「文の京デジタル文庫」所収「明治四十年一月調査東京市本郷区全図」（東京郵便局、一：五〇〇〇）ほか参照。後述する明治三十四年の『犀陽遺文』発行時も同じ住所である。

（3）『明治大正期稀書・珍籍書目解題集』二（ゆまに書房、二〇一〇年）にも、第四～九・十一・十二回の『陳列品目録』複製を収める。

（4）野口充太編『鐸嶺平子尚先生著作年表・略歴』（癸丑会、一九七四年）、遺稿論文集である『仏教芸術の研究』（初刊、三星社、一九二三年）の増訂版（国書刊行会、一九七六年）に平子恵美編の年譜を収める。

（5）①は近江の代官猪飼光治に充てられたものである。髙島幸次「近江堅田の土豪猪飼氏の近世的変貌―幕府代官・旗本および郷士への系譜―」（『龍谷史壇』九三・九四、一九八九年）参照。

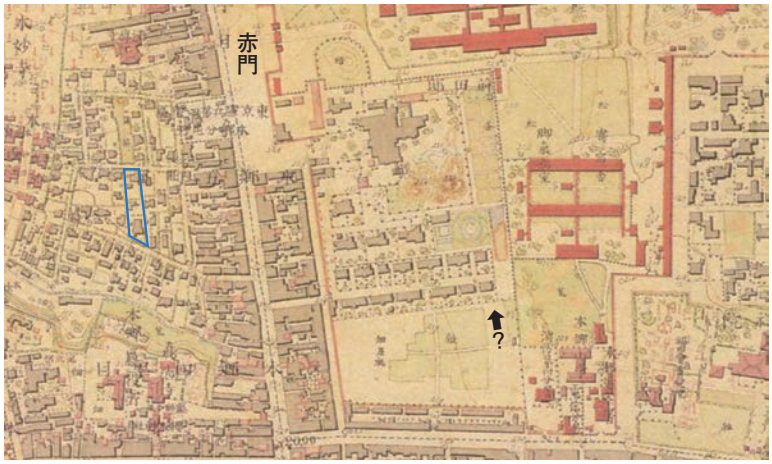
（6）母親幸子が広島に住んでいた時期もある。鴨居悠『野口遵　人間と事業』（東晃社、一九四三年）六八頁。

（7）『石川県史』三（一九二八年）四三六・七頁では下記のように伝をまとめる。「字は士政、通称を斧吉といひ、犀陽と号す。天保元年十二月を以て金沢に生れ、長じて江戸に抵り昌平黌に遊ぶ。次いで万延元年郷に帰り、執政横山隆平に仕ふ。時に幕府政を失し、海内多故なりしかば、之布は主として勤王の説を唱へ、力を国事に効せり。是を以て元治元年譴を得て獄に下り、明治元年纔に赦さるゝことを得たり。此の年之布王師に従ひて北越を征し、三年金沢藩少属に任じ、置県の後文学教師となり、次いで文部省に出仕し、司法省に転ぜしが、十三年官を辞して、前田利嗣の侍読となり、旧藩史編纂を兼ぬ。三十一年三月歿す、年六十九。」

（8）前田侯爵邸の住所。之布は明治六年に金沢から東京に出てきており、遵は金沢生まれだが、一歳下の妹である松本操は「明治七年に東京本郷の加賀屋敷内の長屋で生まれました」（高梨光司編『野口遵翁追懐録』野口遵翁追懐録編纂会、一九五二年、六七三頁）とする。どの程度の建物を「長屋」と自称したか確実でないが、加賀藩邸は明治元年閏四月の火災で建物の多くを焼失し、その報を告げる書状には「其外南鳶小屋并枕小屋辺は相残り」（『加賀藩史料』幕末篇下、一九五八年、八二六・七頁）とあり、藩邸南部の詰人空間（龍岡門外の交差点から総合研究博物館を結ぶラインより南側）に建ち並ぶ長屋群（東京大学埋蔵文化財調査室編『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』〔一九九〇〕第三分冊、附図を参照）の一部は焼け残ったようで、明治四年六月頃以降に、赤門より南側、春日門より西側が前田邸となる。ただし明治十六年「五千分一東京図測量原図　東京府武蔵国本郷区本郷元富士町近傍」（国際日本文化研究センター「所蔵地図データベース」よりWeb公開）では、屋敷内に規則的に建物の建つ一画があり、このあと引用する弟駿尾の談話には、新旧時期が混じっているようであるが、主にこの段階と対応し、「長屋」というのは主人から貸し与えられた邸内の家らしい。

「兄は金沢で生れたが、間もなく親不知を越えて東京へ出た。東京の前田家の長屋に住つたが、当時前田家の本宅は今の赤門の隣りで、厩もあれば長屋の横には馬場もあつた。野口家は長屋の一番奥で、長屋には前田利定さんの父上の利照（上州七日市城主一万石）さん、その隣が前田利武養子男爵前田利功さん、その横に清水澄さんの家があり、その並びの奥が前田家代々の侍医の江島万里、その横が寺西といふ祐筆、その一番奥が野口家すなはち私の家で、広さ、玄関、書生部屋、女中部屋、勉強部屋、座敷、茶ノ間二つといふ七間位あつた。その他長屋には陸軍中将の高田豊樹さんの父高田嘉平氏、小幡酉吉、戸水寛人、竹島慶四郎（小幡氏の実兄）、富山の人で石崎震二、人持組八千石の斯波忠三郎（玄番）男爵斯波（ママ）玄番の弟孝四郎氏らの家があつた。」（前註6鴨居悠『野口遵　人間と事業』七一頁）

他の一次史料に当たっていないが、野口家は南東隅の建物（産学連携プラザ付近）に該当する可能性がある。明治五年前後の前田育徳会所蔵「本郷邸平面図（明治第一期建物）」（堀内秀樹・西秋良宏編『赤門』東京大学出版会、二〇一七年、一七五頁に部分掲載）ほかも未確認。



「五千分一東京図測量原図　東京府武蔵国本郷区本郷元富士町近傍」
（国際日本文化研究センター所蔵）に加筆。青い囲みは遵の住所地番。

なお、残された長屋については、角田真弓「写された大名屋敷」（西秋良宏編『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館、二〇〇〇年）、細谷恵子「赤門と東京大学」（前出『赤門』）、松田陽「史跡とならずに消えた名所―本郷の富士山」（『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』二九、二〇一六年）に検討・言及がある。

（9）『成簀堂古文書目録』（蘇峰先生文章報国五十年祝賀会、一九三六年）三二八・九頁、雑文書一の二八・三三。後者は川瀬一馬編『新修成簀堂文庫善本書目』（一九九二年）一二九頁に「後嵯峨天皇御出家次第」一軸として載り、大正十五年（一九二六）十月に黒田太久馬より購入の内とのことである。史料編纂所レクチグラフ『成簀堂古文書』一二九・一三〇［6800-200-129・130］あり。

（10）『尊経閣文庫国書分類目録』（一九三九年）十門・諸芸に「一五―一六　書」（七九〇頁）二巻・永仁五年写として載る。

（11）山田孝雄「古京遺文の価値」（『古京遺文』宝文館、一九一二年。日本古典全集版にも再録）に諸本異同の解説があるものの、野口本には言及なし。

（12）「故野口之布氏秘蔵書類寄贈

前号記載の「犀陽遺文」の版木を寄贈された野口駿尾氏の実兄野口遵氏（広島在住）より故厳父之布氏秘蔵の左記郷土関係の軸、筆写書類等の寄贈があった。

有栖川宮慰子殿下書、画　二軸
香靄公女画牡丹錦鶏雄雌図　一
温敬公墓誌（野口之布撰文）　一
慶寧公墓誌（同）　一
加賀藩勤王始末（野口之布著）原稿及刊本　二冊
加賀藩勤王家略歴（野口之布自筆）原稿　一
能楽保存ノ議ニ付宮内省ニ請願ノ文案（同）　一
能楽保存ノ議ニ付テノ前田利鬯ノ返書　一通
贈従一位権大納言前田利家卿略事績（野口之布）　一冊
前田氏所蔵楠公訣子図賛考（同）　一
銭屋五兵衛の話（同）　一
従三位前田慶寧勤王事績大要　一
加賀藩勤王者遭難ノ極大略　一
木下順庵ノ在藩中ノ功績　一
退京夾撃論説　一
明治十七年昌平黌旧友会名簿　一
伊豆新島前田氏ニ対スル御回答　一
新島前田氏異聞　一
越能紀行（明治十八年）　一
贈正五位靖斎小川幸三五十年祭記念　一
外ニ題名不詳ノモノ十数点」

（13）金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵文書データベースも参照。

（14）末広一雄『日本民族の優秀性に関する根本研究』（一九四三年）一五六頁。後掲の遵の自伝には日輝の事績も語られる。

（15）④『一切業集第八略抄』見返しに貼られた『古草の調書』（朱書）とある野紙は之布筆の可能性も残り、今後のために留意しておく。

（16）自叙伝に、野口遵述・安藤徳器編『事業談・懐旧談』（生活社、一九三八年）、同『今日を築くまで』（同）があり、前者は聞き書きの雰囲気を残し、後者は再編集して総ルビとしたもの。既出の鴨居悠『野口遵　人間と事業』（東晃社、一九四三年）、高梨光司編『野口遵翁追懐録』（野口遵翁追懐録編纂会、一九五二年）所収「野口遵翁小伝」の他、大塩武『日窒コンツェルンの研究』（日本経済評論社、一九八九年）第一章ではこれらの批判的検討もなされる。社史類は割愛。

（17）大島英吉「野口さんと云う人」（前注『野口遵翁追懐録』）四三七・八頁。当時の実業界において茶の湯・骨董などの趣味が交際に占める大きさなどが念頭にあるだろう。弟の余波は「兄は美術の鑑賞といったようなことも念頭に置いていなかったから、書画骨董にも全然趣味がありませんでした。何処の家でも相当産を残すと、家附の道具として、幾許かの書画骨董を買い込むものですが、兄に限ってそういうことは少しもなく、何物でござれ道具類などは見向きもしないので、一人の道具屋も出入したことはありません。」（『同』「兄遵のことども」六九四・五頁）とする。

（18）中村峯夫「野口遵翁逸事」（『野口遵翁追懐録』）三九四頁。

（19）幸田成友「小学校時代の級友」（『野口遵翁追懐録』）一五七頁。幸田『凡人の半生』（共立書房、一九四八年。『幸田成友著作集』中央公論社、一九七二年、再録）でも遵については触れられる。

（20）菊地大樹「南無阿弥陀仏作善集　解説」『東京大学史料編纂所影印叢書』二・平安鎌倉記録典籍集（八木書店、二〇〇七年）一九頁。

（付記）⑥『和歌真字序集』は、京都国立博物館の親鸞聖人生誕八百五十年特別展「親鸞―生涯と名宝」（二〇二三年三～五月）に修復後の所外初出陳となった。大江広元宛の藤原範綱書状が多数を占める紙背文書に注目したものである。範綱は親鸞の伯父で、九歳の親鸞が慈円のもとで出家する際の後見人となっている。